

平成30年6月19日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K03817

研究課題名(和文)16世紀英国の政治的言論における社会の概念

研究課題名(英文)The Early Modern English Formation of the Term "Society": A Text-Mining Analysis

研究代表者

左古 輝人(SAKO, TERUHITO)

首都大学東京・人文科学研究科・教授

研究者番号：90453034

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はテキストマイニングの技法をシステムティックに用いて近世英語における「社会」の概念史を構築した。その結果、主に以下の諸事実を明らかにした。1) 近世英国の識字層は社会を、伊国を震源とする新古典主義に特有の外来語として捉え、土着語彙フェロシップやカンパニと同定した。2) 16,17世紀をとおして社会は都市的な人間諸関係の全域を包摂するキーワードとして機能した。3) 特に16世紀前半には二者間の関係、同後半には諸団体、17世紀前半には法人諸団体、17世紀後半には政治体制を指示した。社会はこのような経緯で重要語句として政治的言論の中心に浮上し、以降、数世紀に渡る激変の連続を生き延びてきた。

研究成果の概要(英文)：This project elucidated the Early Modern English semantic history of "society" through the process of text-mining. The analysis displayed the following facts. 1) The early modern English literates considered "society" a foreign term particular to Neo-classicism found in other parts of Europe, so they equated "society" with their own vernacular words such as "fellowship" or "company". 2) Throughout the two centuries "society" functioned as a general term encompassing all types of urban associations. 3) There are several non-uniform chronological distributions of the references to the use of "society". In the early 16th century, the word implied transient relationships between two individuals. From mid-century onwards, it tended to denote more durable organizations. At the dawn of the 17th century, organizations and corporate bodies were predominantly thought of as "societies". Finally by the late 17th century, the word came to be associated with the terms concerning central authorities.

研究分野：社会学史、社会科学史

キーワード：社会 テキストマイニング 概念史

1. 研究開始当初の背景

近代社会科学の形成の最初期における society の諸概念を解明するにあたり、当時のテキスト群のうち入手可能な電子テキストをコーパス化し、マイニングするアイデアを温めていた。2010年に Withington が著書 *Society in Early Modern England* において、非常によく似た発想から類似の主題に取り組み、一定の成果を挙げている。

2. 研究の目的

Withington(2010)に提起された、16世紀英国の政治的言論における society の諸概念についての知見を、別の角度から、特に Early English Books Online(EEBO)所収のテキスト群のテキストマイニングにより検証することを主要な目的とするとともに、考察を17世紀にまで拡張する。

3. 研究の方法

Withington(2010)が参照した16・17世紀資料群から EEBO などに所収のものを収集(171点中125点収集に成功)し、複数のテキストマイニングソフトウェアにより分析する。当初の仮説は Withington(2010)に依拠する。

4. 研究成果

本研究は16・17世紀英国の政治的言論における society という語句の意味と用法の変化を、テキストマイニングにより解明した。

同じ主題について、別のアプローチでなされた優れた先行研究として Phil Withington(2010)がある。本研究はその知見を Early English Books Online から構成した26万行のコーパスのテキストマイニングにより検証することを通して、社会科学の概念史・思想史研究に新局面を切り開くことを目指した。

Withington の知見は次のように要約できる、

- (1) 16世紀前半の英国にとって society は大陸ルネサンス由来の新奇な語彙であり、当初ヴァナキュラー語 company, fellowship と同定された。
- (2) Society は 特定目的のための自発的

で思慮ある結合 (voluntary, purposeful and deliberate association)

として、16・17世紀を通して安定した概念内容を持った。

- (3) 16世紀前半、society は、生成しては消滅してゆく、小さく対面的な友誼・親交関係をもっぱら指していたが、16世紀後半以降は組織性・持続性を有する団体を指す用例が増大し、17世紀にはこうした団体のなかでも公式団体を指すことがドミナントとなった。
- (4) Society と company には違いもある。Company が移ろいやすく非公式な団体、およびその固有名を指すのに用いられる傾向があるのに対し、society は哲学的・規範的な議論において 'humane society' とか 'civil society', 'Christian society' というように、抽象的な修飾を伴って使われる傾向があった。

これに対して、本研究によるテキストマイニング検証が明らかにしたのは次のことである。

- (1) 16世紀前半の英国にとって society は新奇な語彙で、company、fellowship と同定されていたのは事実だが、どちらかと言えば fellowship が、company よりも同定されやすい傾向があった。
- (2) Withington が捉える society の概念すなわち 特定目的のための自発的で思慮ある結合 は、現代から振り返った場合にのみ可能な俯瞰的要約だが、それを支持する中範囲の証拠は豊富に得られた。
- (3) おおむね支持されたが、王認された公式団体が多く言及された証拠は17世紀前半に限られた。この原因は、Withington が English Short Title

Catalogue の扉ページに記載された版元の情報を重視したことにあると考えられる。

- (4) おおむね支持されたが、加えて company が武装集団を指す用例が特に16世紀後半に顕著に多いことが明らかになった。

テキストマイニングによって先行研究の知見を検証する、というアプローチは、堅実さの代償として、先行研究の冗長な追認に終始する恐れもあるが、他のあらゆる研究手法と同じく、そうあるべきものではない。検証の延長線上で、先行研究と異なる知見を提起できてこそ、敢えてテキストマイニングを採用する価値がある。またもしテキストマイニングによって先行研究と異なる知見が得られれば、その学術的価値はきわめて高い。テキストマイニングはテキスト資料に現に書かれていることから知見を得てゆく過程が明瞭で、したがって追試験しやすく、先行研究と異なる知見が得られた場合には、知見間の比較とテキスト資料の再照合をとおして、その異なりの意義を精密に評価できるからである。

その意味で、本研究が Withington の導きを完全に脱して明らかにしたのは次の事実である。

- (5) 政治体制を society と呼ぶ用例は16世紀半ばから散見されるが、顕著に増大するのは17世紀後半である。16世紀、政治体制としての society の目的は virtue の保護・涵養に求められていたのに対し、17世紀後半、それは property を尊重する moral の維持に求められるようになった。

以上をまとめると、1 つには次のように言える。近世をとおして英国の政治的言論における society は、序列性を与件としない（対等な）人間関係としての、二者間の友誼・親交関係(fellowship)に始まり、任意の

目的を共にする団体(company)、および支配体制によって一人格としての権利と義務を付与された法人(corporation, college)を指すように成長し、支配体制それ自体を、序列性を与件としない対等な人間関係として正当化するまでになった。これは、20世紀の相互作用理論/コミュニケーション理論が、society を、相互作用から慣習・制度へ、そして関係そのものの物象化へ、という発達過程として概念化したことと興味深いかたちで対応している。

Anthony Giddens (1987=1998:41) , Immanuel Wallerstein (1987:315) ,Ulrich Beck (1997=2000:25) , John Urry (2000=2006:9-10)をはじめ、現代の令名高き社会学者のなかには society の術語としての意義を強い調子で否定する者が珍しくない。議論の中身を調べてみると、これら society 廃棄論の多くは実質的には society と国民国家の同一視を批判することを主旨としており、国民国家以外における多種多様な人間関係の重要性に注意を促す健全な主張である。それ自体に異存は全くない。ただし、だからといって、それが society を無理心中させるべき正当な理由になるとは思われない。それどころか、概念史を踏まえれば society ほどこうした構造変動期における人々の共同生活を捉えるのに好適な語句は他にない。

過去約200年に渡る sociology の歩みから少なくとも次のことは確からしく思われる。どんなに客観的に存立しているように見える制度も、人々の日々の関わり合いから生じる 特定目的のための自発的で思慮ある結合 として理解可能である。しかし客観性を高めた制度と人々の日々の営みのあいだには時に軋轢が生じ、適切な調整なしには犠牲が大きくなる。両者のあいだの深刻化した軋轢を調整する過程では 新しい 特定目的のための自発的で思慮ある結合 の試行錯誤が不可欠的に必要になる。

現代における 国民国家 などは、そうして軋轢も犠牲も大きくなってしまった制度の1つの典型例である。その状況下、国民国家 を 特定目的のための自発的で思慮ある結合 つまり society として漫然と説明し続けることは、結果的に、犠牲を蒙っている人々に向けて、もっと耐えよと説得するに等しい。Society 廃棄論者たちがそれを嫌うことは不合理ではない。

しかし 国民国家 と人々のあいだの軋轢の調整も、結局は society の名の下に、特定目的のための自発的で思慮ある結合 として現に、不断に、活発におこなわれているし、説明され続けている。本研究が見てきたように、語句 society は 16・17 世紀英国の間延びした激変の渦中で、まさにそうした調整過程を理解可能にし、また調整過程の担い手そのものとなることによって、重要語句として浮上したのだった。そうして鍛え上げられたからこそ、society はその後も幾世紀かを超え、こんにちでも有用性を保っているのだろう。やはり廃棄する必要など全くない。

むしろ私たちにとって課題は、16 世紀以降幾度か繰り返してきた society の展開過程の次のサイクルの起点を、現代のネオ・リベラリズムとネオ・マーカンティリズムのせめぎ合いのなかに探り当てることができるか、である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- (1) Teruhito Sako (2018) “The Early Modern English Formation of the Term Society: A Text-mining Analysis”, *Jinbun Gakuho*, S14-1, 1-30.
- (2) 左古輝人 (2017) 「近世英国における Society の形成：テキストマイニングによる分析」『社会学評論』271, 368-385.

〔学会発表〕(計1件)

左古輝人 (2018) 「近世英国における『社会』

の概念」ソーシャルコンピューテーション学会研究例会、於秋葉原ダイビル首都大会議室。

〔図書〕(計1件)

- (1) Teruhito Sako, Cathy Shrank, Phil Withington (et.al.), (Forthcoming), *Translating Utopia*, Oxford University Press, 350pgs.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

左古輝人 (SAKO, Teruhito)
首都大学東京・人文科学研究科・教授

研究者番号：90453034